大陸から運ばれた可能性の高い石器

旧石器時代の氷河期にはシベリア大陸と北海道が陸続きになり、オオツノシカやマンモスゾウと共に人々が北海道に渡ってきました。縄文時代になると本州系統の土器文化圏が北海道に伝わっており、南から人が入ってきたと考えられています。また、オホーツク人は大陸からの文化を道東を中心に広げました。このように、北海道、特に道東地域は南と北の両方の文化が交錯した、考古学上、非常に興味ある地域です。

写真１ 石刃鏃と関連した石斧
（羅臼トビニウス川南岸遺跡）

石器の一つに石斧があります。石斧の製作技法は大陸で生まれた技術が北海道に伝わったとされています。ここ数年の調査により、縄文時代前期以降、旭川西の神居古潭峡谷付近に産する青色片岩製石斧や平取付近に産するアオトラ石と呼ばれている緑色片岩製石斧が広く使われていることが分かりました。縄文時代前期以降はすでに北海道の優秀な石材を使っているようです。

大陸からの石材が北海道に持って来られているのではないのかとさらに時代をさかのぼりました。すると、縄文時代早期には大陸からの関連が深い石刃鏃（せきじんぞく）と呼ばれる大陸からの技術をもたらしたグループがあり、特徴的に小型の穴あき石斧を使っています。今回、北海道教育大学札幌校の分析機械を使い羅臼から出土した石刃鏃と関係した小型の穴あき石斧（トビニウス川南岸遺跡）を分析しました。すると、トレモラ閃石（マグネシウムの多いカルシウム角閃石）の塊の石斧であることが分かりました。

北海道周辺の地質環境を調べました。石斧の石材の多くは、蛇紋岩や蛇紋岩と関連して産するロジン岩（蛇紋岩と比較してカルシウム、マグネシウム、アルミが多い）、蛇紋岩中のブロックで産する青色片岩、緑色片岩の高圧変成岩など蛇紋岩帯の岩石を使っています。北海道周辺の蛇紋岩帯は北海道を南北に走る神居古潭帯（図１）とシベリア大陸のナホトカ付近に分布するサマルカ帯があります。（図２）サマルカ帯は糸魚川付近に分布する飛騨外縁帯の大陸延長部だと考えられています（図３）。飛騨外縁帯からはヒスイや曹長岩などが大規模な熱水作用のもとで作られた岩石や鉱物が蛇紋岩のブロックで産しています。サマルカ帯にも大規模な熱水作用で生まれた岩石が分布することが推察されます。一方最近の研究で、神居古潭帯にも熱水作用によるヒスイやロジン岩が小規模に産することが分かりました。

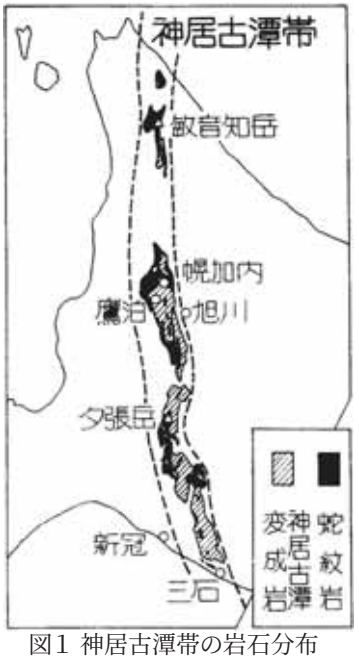

図1 神居古潭帯の岩石分布
（松井ほか 1984）

話を羅臼の石斧に戻すと、トレモラ閃石はロジン岩の一種で（カルシウム、マグネシウムが多い角閃石）、激しい熱水作用の環境で形成されます。少量のトレモラ閃石は神居古潭帯でも形成されますが、今回の資料のようにトレモラ閃石の塊で産するのは飛騨外縁帯の延長部であるサマルカ帯の可能性が高いと思われます。また肉眼鑑定ではありますが、石刃鏃と一緒に産する蛇紋岩石斧は緑色が濃く、アルミ成分が多い緑泥石成分が多いようです。アルミ製分が多くなるのも、熱水作用が原因と考えられますのでシベリアのサマルカ帯の可能性が高いと思われます。アルミ製分が多い緑泥石成分に富む玉は、旧石器時代の今金町ピリカ１遺跡からも出土しており、大陸から持ち込まれたと推論しています（渡辺、1985。岡村ほか、2003）。

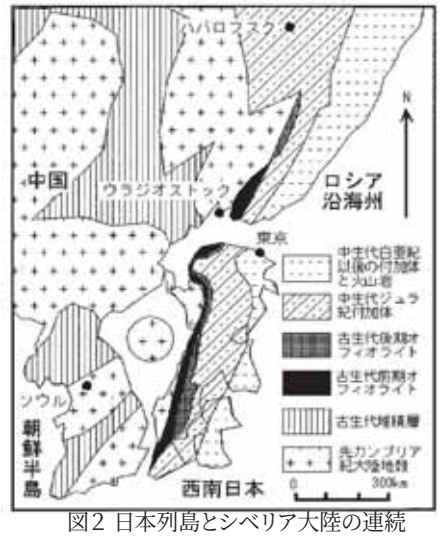

図2 日本列島とシベリア大陸の連続
（石渡 2001）

このように、旧石器時代や縄文時代早期の石斧や玉は大陸から直接もたらされたようです。その後、時代が進み縄文時代前期には北海道の石（青色片岩、緑色片岩）を使って石斧を作っています。その間の時代（縄文時代早期末）には、神居古潭帯の蛇紋岩やロジン岩が使われています。①大陸の蛇紋岩と関連した岩石（蛇紋石など）→②北海道の蛇紋岩と関連した岩石（蛇紋石など）→③北海道の蛇紋岩と関連した岩石（高圧変成岩）へとまず場所が大陸から北海道へと変わり、次に岩石の種類が蛇紋岩から高圧変成岩に変わっています。興味深い変化と思われます。これからデータを増やしていきたいと考えています。（合地）

図3 サマルカ帯の蛇紋岩帯（石渡 2001）

発行　斜里町立知床博物館協力会　2007.4.26
099-4113　北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL:0152-23-1256　FAX:0152-23-1257